

放課後学習支援事業における記号的媒介を通じた 教員志望学生の成長過程

○富田英司（愛媛大学）

大石若奈（愛媛大学大学院）

キーワード：教師の成長，アクション・リサーチ，当事者研究

問題と目的

今教師に求められている成長は教師が今持っている枠組みの中では起こりにくく、ヴィゴツキーの指摘する記号的媒介による発達としての成長が必要である。これまでの教師教育研究では、実践と省察の循環的過程を通して教師の成長過程が数多く検討されているが、その中で教育実践理論が記号体系として教師自身の発達をどのように媒介して、実践を質的に変容させていくのか明らかにするには至っていない。

そこで本研究は、学生主体の放課後学習支援プロジェクトを研究フィールドとした当事者型のアクション・リサーチによって、Differentiated Instruction（以下DIと略、Tomlinson, 2014）や逆向き設計（Wiggins & McTighe, 2005）といった教育実践理論の取り入れを通して、どのように一人の教員志望学生が成長していくのか質的に明らかにすることを目的とした。

本研究のフィールドである愛媛大学放課後学習教室は、愛媛大学教育学部がその隣接校区の小学生に無料で放課後に提供する学習の場である（富田他, 2019）。一週間に4回程度開催され、曜日ごとに「外国語」「算数」等の授業がボランティア学生により企画運営される。学生主体の活動であると同時に、教育学部が責任を持つ事業であるため、大学教員もその企画運営に協働参画し、現代的ニーズに基づく課題を検討するための先進的な単元が常時検討されている。

方法

参加者 主なインフォーマントは、放課後学習支援事業の学生代表として運営に携わる第二筆者である。第二筆者は2019年4月から「読み書きコース」を他の学生と共に始めた。日本語の習得が不十分な外国出身の児童等、従来型の一斉授業では、その言語能力を発揮しにくい児童が、楽しく言語活動に参加し、読み書きの能力を高められることをねらって開講された。

分析 第1筆者のフィールドノートや議事録、学習指導案、SNSでの書き込み内容、授業の提出物等を対象に、記号的媒介として教育実践理論の役割に着目して、当事者として分析した。

結果と考察

DIは多様な学習者がそれぞれ効果的に学ぶ手法として、欧米やアジア各国で実践されており、

コースのねらいに即していることから、2019年2頃、第一筆者が第二筆者に紹介した。

2019年度1学期にDIは導入された。当初第二筆者はDIの授業を見様見真似で実践したものの、準備に追われ、メンバーからの疑問に答えられなかった。DIの思想と自分達の持つ前提（例「全ての児童に同じ到達度を期待する」「苦手なことを教えるべき」等）の衝突も見られ、毎回、実践が終わる度に「DI、本当に意味わからん」「正解がわからん」といった発言がみられた。その中で、DIを用いない授業を实践したいという声がメンバーから聞かれることもあった。

夏休み中、DIの勉強会を学生が企画したことで、自分たちの活動を理論的に振り返る機会が得られ、自分たちが暗黙に持つ学習観が明らかにされた。

2019年度3学期には、大学院の授業で学んだ逆向き設計を取り入れ、「2学期までは、ゴールが不明確だったため、毎回の授業を考えることが非常に難しかったが、3学期からはどんな授業がしたいかがすぐに明確になった」と第二筆者は振り返っている。その背景には、DIを効果的に導入する準備過程として、逆向き設計が役立っており、授業や学生グループのマネジメント技術の向上も手伝って、授業の効果が見え始めた。

他方、2020年度1学期の準備段階で、逆向き設計の考え方で学習活動を考案する過程で、培いた能力を要素に分け、その要素を教え込むという要素還元主義的な学習観に依拠した授業計画に再度戻っていることが確認された。

以上のことから、教育実践理論を媒介した教師の発達には、①実践を支える知識・能力獲得のための長期的な努力の過程、②理論的枠組を参照した省察を反復し、元々教育者が持つ信念に基づく実践的行動を明確にして、より体系的な理論の理解と応用の範囲を広げていくことが重要であることが示唆される。

引用文献

- 富田英司・大石若奈・市本早香・中山晃（2019）学生主体の放課後学習支援における活動の変遷
大学教育実践ジャーナル, 17, 67-74.
- Tomlinson, C. A. (2014) *The Differentiated Classroom*. ASCD.
- Wiggins, G. P. & McTighe, J. (2005) *Understanding by design*. ASCD.